日本G.A.P.ニューズレター

No. 5

日本G.A.P　ニューズレター　第5号

目　　次

サイレンス・グループと金 ―――― C.A.ハニー　1
最初の因 ―――― C.A.ハニー　2
1962年2月4日の科学的状況 ―――― C.A.ハニー　4
断定的及び否定的考え方と動機 ―――― G.アダムスキ　6
質疑応答 ―――― C.A.ハニー　8
地震に関する報告 ―――― C.A.ハニー　11
私はなぜメキシコへ行くか ―――― G.アダムスキ　12
地震と空震 ―――― C.A.ハニー　13
バンスン氏からの書簡 ―――― 16
編集後記 ―――― 17

この号ではアダムスキの代理人C・A・ハニー氏が各国G・A・P宛に発行している〝コズミック・サイエンス・ニューズレター〟の一九六二年二月号の内容を全訳で紹介致します。文中カッコ内の註は久保田によります。以下の各記事は右のニューズレターに掲載されている順序にしたがって載せました。――編者

× ×

サイレンス・グループと金

C・A・ハニー

私のニューズレターの才一号が発行されて以来、才一号で言及した円盤サギ事件の関係者である一コンタクトマンの氏名を明記しなかったことで私は非難を蒙っています。私が受取った或る手紙には次のように述べてありました。「私はコズミック・サイエンス・ニューズレターに果して読む価値があるかどうかを決めるのにしばらく躊躇しました。その唯一の理由はあなたがはっきり書かないこと、特に或るコンタクトマンの氏名を明記していない点にあります」

私は、法廷に持出される法的な証拠が出ない限り、サギ師だといって人を非難するのは適当でないと今もなお考えています。この人々を明るみに出すのは容易ですが、しかし証拠が出ない限り、それは「自分のことを棚に上げて人を非難する」ように聞こえます。なぜならわれわれもコンタクト例を主張しており、しかも人々はわれわれをサギ師だと言っているからです。一般の人は他のコンタクトマンと同様に私やアダムスキ氏をも信ずべき理由をもっていないのです。

私は〝宇宙人〟の名のもとに仕組まれている種々の企てがどんなものかをお知らせし続けますが、それに関係ある個人の名前を明らかにすることはしません。この種のインチキにひっかかっている人々は、判断をしてこれ以上熟中することなしに落し穴を避けることができるでしょう。法廷に持出される文書による証拠が有効となれば私はそれを掲げましょう。

ラインホールト・シュミットの場合においては新聞記事の資料がその証拠となります。「新しいコンタクト」という見出しのもとに次のような記事が一九六一年十一月十九日付のロサンジェルス・タイムズ紙に出ています。

「空飛ぶ円盤の乗船者、刑務所の独房に着陸す……ベイガーズフィールドの元住人で宇宙船と土星人とにコンタクトしたと称するラインホールト・O・シュミット(六四才)は、二件のサギ罪によりオークランドで土曜日に一年から十年の刑に服するよう宣告された。シュミットは或る六十三才の未亡人を説得して、彼が宇宙船に乗って地球をまわっているあいだに発見したという二個の〝自由エネルギー〟の水晶石を五千ドルで買わせた罪を問われたのである。法廷における証拠によって、彼は他の人々からもほぼ五万ドルにのぼる金をまきあげていたことが判明した。

一九六〇年、彼がベイガーズフィールドに住んでいた当時、彼は一九五八年にベイガーズフィールドの人気のない道路上で土星から来た二百フィートの宇宙船に出会して、宇宙船の大人の乗員とともに乗込んだと声明した。彼はかつて円盤に興味をもつロサンジェルスの数グループに講演している。

またシュミットは一九五七年にネブラスカ州カーニーの或るクリークの底に着陸した宇宙船の現実と語り合ったとも称している」

ネブラスカ州カーニー付近のクリークの底に一機の宇宙船が着陸したのをシュミットが目撃したことを私は否定するものではありません。これは実際に起った事なのです。しかしそれは宇宙人の船ではありませんでした。それはカナダで建造された或る試験機であって、戦後カナダへ来たドイツ人科学者が実験していました。その機体はほんとうの宇宙機によって観察されていたのであって、そのホンモノの宇宙機があまり接近したために試験機のエンジンが停止したのです。シュミットはその後しばらくのあいだそれが土星から来た宇宙船だとは語りませんでした。彼の元の話は後に行なった説明と全然相違しています。

それは超極秘の試験機であったために、彼の目撃の真実性を完全に抹殺する必要があったのです。精神鑑定をするために目撃者を病院に入れて、しばらくして本人を退院させてから一般人に最初の目撃や着陸をも疑わせるような陳述をさせるとは実に巧みなやり方です。空想的な物語をさせるためにサイレンス・グループはこのようなコンタクトマンたちの幾人かに金を出しているのではないかと私はときどき考えています。数名の者にそれぞれ食い違った目撃談をやらせれば混乱が生じて真相のすべては隠されるのです。

以上のように私が考えた一つの理由は、アダムスキ氏にかつて話がもちかけられて、彼の著書の内容が作り事であるという簡単な声明書に署名をしてくれと五万ドルが差出されたことがあるからです。

前記のコンタクトマンたちに資金を供給するためにどこからか金が流れ出ています。彼らはたしかに講演をしながらその金を作っているのではありません。たぶん彼らはシュミットがやったようなサギで金銭問題を解決しているのかもしれませんし、それとも実際にサイレンス・グループから金を渡っているのかもしれません。

〔付記〕先月号で私は〝宇宙哲学研究グループ〟が世界各地で結成されつつあると述べました。私はこれらのグループの保証をするというわけではありませんが、しかしこの各グループはG・A・Pの仕事を援助したいと願う多くの人々によって組織されていますので、私は各グループの所在地を掲載するつもりです。各グループともアダムスキ氏の著書〝宇宙哲学〟と〝精神感応〟を研究用のテキストブックとして使用しています。われわれは右の二著書に述べられている内容だけを支持します。

×　×

最初の因

C・A・ハニー

先月われわれは次のような結論に達しました。すなわち、各太陽系が無限に過ぎた時間を通じてそれぞれ自分勝手に存在するとわれわれが仮定するならば、無限に過ぎた時間という概念はそれ自体において不可能であるということを意味することになるというのです。それが考えられるとしてもやはり説明にはならないでしょう。現在の瞬間における何物かの存在は、それが一時間前、一日前、一年前、または無限に過ぎた時間を通じてさえも存在したという発見または知識によってより容易に理解されるでしょうか。もちろんできません。知的な考え方においてもこ

のような説を組み立てることはやはり不可能です。

自分勝手に出来上ったのだと言うためには、われわれは原因なくして実際の存在と化してゆく形なき存在の概念をもつ必要が起ってきます。たとえこの考えを(自分勝手に出来上ったという考えを)想念のなかに描くことができたとしても、われわれは実際の存在物としてあるところの〝物〟として考える必要があります。一つの〝存在しないこと〟は他の〝存在しないこと〟と異ならねばなりません。

過去から現在にわたって殆どの哲学者や神学者は、天と地とはもと存在していた無機物、ガスなどから作られたと仮定しています。これがほんとうだと仮定されても、それはやはり説明ではありません。その無機物やガス類はどこからまたのでしょうか。広大な空間以外には何も存在しなかったとしても、それはやはり説明を要します。

結局、あらゆる結果は原因をもっています。あとをたどってみますと、われわれはついには〝最初の因〟の必要性を見出すのです。この〝最初の因〟の性質を知的な想念のなかで描いたり組立てたりするのは不可能です。この〝最初の因〟をわれわれは神と呼んでいます。これは母性原理、すなわち〝母性自然〟(註。いわゆる自然界)にたいするものとしての〝父性原理〟です。キリストはこの〝最初の因〟を〝われらの天の父〟と言ったのです。

人間についてはどうでしょう。最初の人間はどこから来たのでしょうか。本質的にはここでも同じ言葉があてはまります。人間の姿をした人間はその起源において宇宙に似たものと考えられねばなりません。人間は始めもなければ終りもないのです。太陽系と人間の両方は、人間の心の限界のために以上のように考えられねばなりません。たとえわれわれが物質の性質やその始まりをどうしても理解できなくても、われわれは今日存在するあらゆる物は、その構造をなす元の原子に関する限り、始めも終りもなかったと説明します。

もしわれわれが、この太陽系が形成されたときより数百億年以前にさかのぼってみるとすれば、やはり人間の姿をした人間が植物や動物とともに当時存在していた各太陽系のどこかの遊星に存在しているのを見るでしょう。

誤解してはいけません。遊星や太陽は生まれば消えてゆきますけれども、それらを形成している原子は始めも終りもなく、人間の心が考え得る限り一存在してきたのです。ガスから太陽系になり、また元のガスに返ってゆきます。

かくて、人類は地球にのみ存在するという概念は不合理であることがわかります。それは論理的な心をもつ人には全く考えられないことであり、理解力を殆どもたない人によって促進されています。非論理的な心の持主のよい例は次のとおりです。

教会のなかで治癒現象が起ると、それは神が癒したのだと人は言いますが、同じ治癒が教会の外部で起るならばそれは悪魔の力によってなされたのだと人々は言います。これは、キリストが悪魔の力によって悪魔を追いはらったといって非難されたという聖書中の例と似ています。内部で分れ争う国は立ちゆくことができないとイエスは答えています。

宗教が科学に対立するたびにそれは負かされています。教会の出す結論の論理上の矛盾の暴露、何かの特殊な教会の不合理なドグマの証拠などは必ず教会を弱めてそれを信者から分離させています。

教会は知識にまさる物についての知識をもっていると公言していますが、このことがそれ自身の教えに矛盾しているという事実はポイントを

はずれたものです。教会はたった一言で神はあらゆる理解にまさると言い、次の言葉で神がこれこれの特質をもっていると断言したりします。

朦朧たる背景のなかに宗教はその背後にあの小さな基本的真理を常にもってきた。この基本的真理とは、或る〝最初の因〟が存在し、人間の義務と運命はその〝最初の因〟にさかのぼって尋ねて出会い、そのなかに吸収されるように準備することにあるという真理です。

われわれが自身の誤った信念や考え方を誤めて、誤めることの必要に気づかざるを得なくなる場合に際して変化するほどに広い心の持主でなければ、われわれは自身の運命に向って全然進歩してはいないのです。

かつて教会は太陽は純粋で汚れなきものと信じました。太陽が悪魔で汚れていると言えばそれは死にあたいするほどの罪でした。しかし結局は論理的な科学が教会にたいして教えて誤った信念を認めさせたのです。かつて太陽は毒に引かれ、磁石は電に引かれていると考えられたことがありました。しかしすべては結局宇宙の法則にしたがっていることが発見されました。

〝最初の因〟についてのわれわれの意識はその結果を観察することによってわれわれに明示されます。それを想像することはできません。それは直観を超えるものです。

あなたが以前に抱いていた考え方に一致しないような一つの声明を握ってはいけません。そして他の考え方をも捨てないことです。むしろ、あなたの論理的な思考方を用いて自分のいろいろな考え方をありのままにくまなく書いてみるのです。次にそのもろもろの見解や教訓のすべてを比較して、広い心をもって、あなたが更に進歩した結論に達しているか、また進化というハシゴを更に一段登ったかを調べてみることです。

次号で私はこの地上における人間の目的を論じ、理論的に根拠のある人生哲学のための、この基本的な導入と基礎としてもう少し考えを述べてみようと思う。また人間の死後がどうなるかを語り、来世のよき生活のためにこの世でよき生活をすごそうと努力すべき根拠のある理由をお伝えしたいと思います。

×　　×

一九六二年二月四日の科学的状況

――星占いを投げ捨てること――

C・A・ハニー

一九六二年二月四日に古代人のいわゆる七つの遊星である水星、金星、火星、木星、土星などと太陽及び月のすべてが天空に集合します。最も離れるのは火星と木星で、その距離は約十六度の開きがあります。太陽は皆既日蝕となります。米国の太平洋岸ではこれが午後四時五十五分頃に起り、太陽は地平線上約五度位の時で、日没前に観測するにはあまり時間がありません。

この集合は異なる光景で大体二日間続きます。過去にこのような集合が発生したときは、物理的に地球にたいして、また歴史の流れにも何ら異常な事は起らなかったといわれます。

二月四日には何が起るでしょうか。答えはきわめて簡単です。誰も知らない、ということです。ところで一つの新しい事実が現在つけ加えられています。太陽がその磁極を変えた事実です。これは、互に引き寄せ合っていた力が今度は、撓し、互に反撥し合っていた力が引き合うこと

になります。新しい、異なる力（複数）と緊張（複数）が今や全遊星に及びつつあり、例の集合のあいだに他の遊星よりも地球に最も影響を及ぼすことになるでしょう。これは他の遊星群が地球からみて同一の方向に集合するためです。それらの力（フォース・フィールド）の場は結果して普通以上に地球に影響を及ぼすでしょう。

地球のまわりのその新しい異なるフォース・フィールド群は温度と気圧の帯（ゾーン）を新しい位置に変えるでしょう。地震は各地でもっと発生する傾向にあります。起るとすればひどい地震が大地の隆起と沈下をひき起すかもしれません。一万二千人が死んだリビヤとモロッコの大地震では湾自体が海抜八百フィートも持上り、チリーの地震では二十五マイルの長さの谷の海抜が千フィートも変化しました。

先月号でアダムスキが述べましたように、ますます大きな度合で、より大きな広い地域において人々は不気味さと不安を感じるでしょう。各国の人々によってますます畏怖らしい物事が言われたり行なわれたりするでしょう。この人々はこのような行為の意図が何であるかに気づきさえしないでしょう。

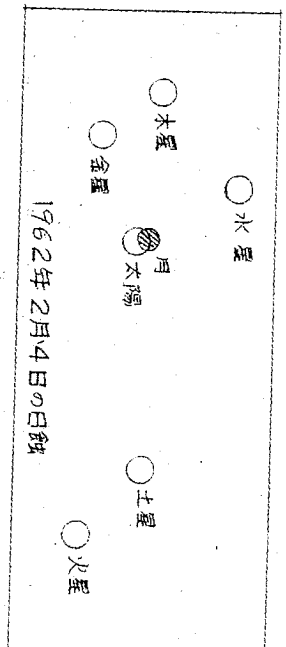
心のよくバランスのとれた人はこんな物事によって自分が左右されることはない筈です。われわれはやはり自分自身の運命を選ぶことができるのであり、星が人間に影響を与えるといったことをわれわれが信じないで、こんな考えに左右されない限り、遊星の位置は人間に影響を与える筈はないのです。われわれの日常の生活に反応を起すものはわれわれ自身であって遊星ではありません。

占星術の信者は彼らの日常の星位観測を行なっています。そして彼らはそれを信じているために、彼らの潜在意識が、起るだろうと信じている"結果"を彼らに生ぜしめるのです。彼ら信者は、潜在意識が自分をあらゆる種類の"災難"の状態に向かわせる"災難にかかりやすい人"に似ています。彼らは潜在意識的にかかる事態が発生するのを望んでいるのであり、またそのような災難は自分の側（がわ）の何らの意識的な知識をもたない人によって生ぜしめられるのです。

今日占星学上の予言類は私に一九二四年の"集合"のときを思い出させます。当時"古代人の七つの遊星"は、水瓶座と双座の"湿気の多い"（サイン）占星学上のしるしを表わしていました。ここで当時の占星学者たちは恐れて、大洪水から世の終末に至るまであらゆる出来事を予言したのです。おわかりでしょうが、実際にこんなものは起りませんでした。それどころか多くの地域では二月が一年中の最も旱魃した月でした。

多くの占星学者たちは過去の歴史を指適し、多くの歴史上の出来事を天文上の現象と結びつけようとしています。実際、何かの日付をちょっと選び出してみれば、その日付と一致する天文上の現象が見出せるでしょう。しかし前記の太陽と遊星群との関係は別として、占星学と実際の出来事とを結びつける証拠は存在しないのです。

人間がなすのに最上のことは、星占いの星位観測などは投げ捨てて、あなたの生活の知識とその教訓に従って自分の望む方法で生きることです。



断定的及び否定的考え方と動機

ジョージ・アダムスキー

過去数年間に多数の人が断定的考え方の研究を始めてきました。しかし多くの点で断定的考え方は否定的考え方と全く同様によくないものです。この両方のいずれも極端な考え方です。応用するのに望ましくてしかも有益なものとしては、全体が見おろされる真中の中景というものが存在しています。

断定的考え方の危険性を示す一例はアドルフ・ヒットラーでした。彼はそれを極端に行使して狂った力となり、この考え方を用いることによって自己の全計画を歪めてしまったのです。一方、大衆は否定的思考でした。行為し始めたとき、彼らも極端に走った否定的思考の犠牲になったのでした。

この二つの考え方がよくないとすれば、正しい考え方とは一体何でしょう。正しい考え方を生み出す接触反応剤は〝動機〟です。ここで正しい考え方という場合、それは必ずしも善き考え方を意味するのではありません。むしろそれは断定と否定の二つの力を用いて、動機と呼ばれる一つの結果を引出す均衡のとれた考え方を意味します。

動機を必然的に伴うその特殊な法則は人間の表現や行動のあらゆる径路を通じて働きかけます。あらゆる他人を排除して自己改良を試みようとする動機は悪い結果以外の何物をもたらしません。それはあらゆる人々から本人を分離させることになり、望ましくない利己主義を促進し、個人の自我を誤えることになります。

ところが、できるだけ多数の人を助けようという動機は、動機が促進される径路を自働的に高め、改良します。例をあげましょう。かりに私が隣人のなかに好意を盛りあがらせようとすれば、私は自分を伴わないで自己を忘れたままに世間の人々のためにあらゆる事をやります。私は自分を含む必要はありません。なぜなら私は自己改良が表現される径路になるからです。私は自働的にその径路のなかにいるのです。この種の善き動機は宇宙的に認められるものです。

自己改良を試みようという個人的な欲求は否定的な支柱のない断定的考え方に似たものです。それは必ず混乱をひき起し、ついには完全な不満足をもたらして本人を不均衡にします。それが断定的であっても否定的であっても殆ど相違はありません。同じことです。もし個人の自己改良にたいする動機が断定的だけかまたは否定的だけならば、体験は実際の動機にはかかわりなく半分の真理だけをもたらします。なぜなら一対の片方が除外されているからです。徹底して単純であろうとすることは危険な習慣です。

自己改良計画で成功するためには、前に述べたように人は多数の人にたいして召使いにならねばなりません。そうするとその〝多数の人〟はその人の欲求の動機が発展したり成就したりするのに役立ってくれるのです。これはみな神の計画にしたがったものです。そうすることによって、この努力でもってこちらから援助する人々は自働的にこちらの教師になります。これは全く等しい人間が二人と存在しないためです。あなたが援助しようとしている相手のいずれもが、あなたが相手を理解しようとする努力にたいして何らかの報酬を差出します。実際にはわれわれは互に教え合っているのです。これは自己改良のほんとうの方法であるばかりでなく、生命のほんとうの動機です。

キリストはそれをきわめて端的に言っています。すなわち、もしあな

たが他人のドアーを通って入るならばあなたは盗人であると・われわれにとっては盗人は心地よい生活を送っていないように見えますが、しかし彼らは自身の環境のなかにあれば結構楽しいかもしれません。これは自然の状態の楽しさではありません。その盗人が同じ滞在仲間のなかにいればやはりボロボロで汚いのです。人間は如何に努力しようとも少数者だけに奉仕することによって楽しくはなれませんし、生命と宇宙の高次な法則を知ることもできないのです。自分が欠くべからざる一部分となっている万物に奉仕しながら父の意志を行なう者は幸なるかなです。

自己を十分に理解するためには、人は無数の人々に奉仕する必要があります。無数の人々が存在するからには神の表現である無数の経路が存在します。ただ一つの経路かまたは少数の経路だけでは自己の理解に役立ちません。それはちょうど万物を照らしている太陽が急にそれをやめて一個人だけを照らすことができないのと同じです。こんなことをしたらその目的を達成することにならないでしょう。個人が〝自分自身を知る〟ためには、動機が〝多数〟を通じて存在するのです。

私は自分自身を除外して無数の人を援助しようという欲求または動機をもっていますので、この奉仕をするために十二度ばかり生まれかわっています。われわれの判断によればそれらの誕生のなかには不愉快な場合もありましたし、きわめて愉快な生活もあったということです。しかし誕生――新生――というものは私がこれまでに奉仕をしてきた多数の人によって私に与えられています。なぜなら私に何かを教えてくれない人はいないからです。

私がこれまでに回答してきた無数の手紙類のどれもが、金銭、黄金、またはこの世が与え得る如何なる名声などよりもはるかに価値のある事を私に教えてくれました。その手紙類を通じて私が知った物事は私に新しい誕生を与えてくれ、現在の私という人間にしてくれたのです。この手紙類にたいする絶え間のない回答は明日私を更に別な人間にしてくれるでしょう。ささやかな方法によって私が奉仕する相手の人数がふえればふえるほど、人々は私という人間をますます大きくしてくれます。一方、私はその人々を通じて更に私自身をよく理解することになります。もし私が少数の人か自分だけに奉仕したならば、私が知らねばならぬ物事を誰が教えてくれたでしょう。私自身についての知識は私が奉仕した人数と同じほどに小さなものだったことでしょう。

あなたがたにたいする私の助言は次のようなものです。できるだけ多くの人に奉仕しなさい。奉仕する相手がふえればふえるほど、あなたがた自身についての理解が高まるでしょう。実際にはこのことが生まれてきたための運命を成就したいと願う人の動機になるのです。

神は万物に奉仕していないでしょうか。神は自分のための考えをもってはいません。だからこそ神は最高なのです。そして、神の子であるわれわれも同じようにやらなければ神の意志に従うことにはならないでしょう。次のように質問してみましょう。神はわれわれかもしくはその創造物の何かに日常の必要な物を供給してその報酬を求めるでしょうか。いいえ、求めはしません。神が受ける報酬は、その創造物が創造された目的を達成するとき、求められることなしに来るのです。人間も同様です。これが地上における人間の目的を達成する唯一の動機です。それは他の諸遊星でもきわめて立派に遂行されているのです。

X

X

質疑応答

（註。これはコズミック・サイエンス・ニューズレターに掲載された〝疑問と回答〟の全訳で、回答はハニー氏によります）

〔問一〕〝同来記〟のなかでアダムスキ氏は大母船の頂上を歩いたと述べています。宇宙空間には空気がなく、しかも危険な放射線や微粒子類が満ちているのに、どうしてそんなことができたのですか。（フロリダ州マイアミ、J・F・K）

〔答〕　母船はそれ自体が磁場をもっており、それが毛布のように船体を包んでいます。この磁場は性質において引力をもつもので、地球を離れても船体の周囲に大気を保有しています。アダムスキ氏はわれわれが地球上にいるのと同様にこの大気の毛布のなかにいたわけです。この大気が彼に呼吸を可能ならしめ、また空間中で彼を保護したのです。船体の引力は地球の引力にならったものです。その船体は静止しているように見えましたが、実際には地球の周囲の軌道に乗っていました。

〔問二〕　アダムスキ氏が他の遊星上の人間と霊的にコンタクトしたという説を私は信じませんが、霊的なコンタクトも理論的には可能だということを私は否定もしません。宇宙人はそんな方法を用いないと言っています。他の遊星でかかる霊交法を用いる確実な例がありますか。（フロリダ州マイアミ、J・F・K）

〔答〕　ありません。誰もそんな方法を用いません。警告を発したりするには精神感応が応用されますが、これは霊交ではありません。いわゆる霊的なコンタクトとその原因などに関する十分な説明はアダムスキ氏の著書〝精神感応〟に述べてあります。宇宙人は〝昇天したキリストたち〟または宇宙人自身が地球人へ霊的にメッセージを送るということを認めてはいません。

〔問三〕　科学者のなかには、地球人に似た人間が円盤の内部に乗ることは不可能だと考えている人があります。なぜなら、もし乗っているとすれば、あのような凄まじいスピードでの九〇度のターンに堪えることは如何なる生物にとっても不可能であるからです。かりにそんなターンがなされるとすれば、彼らはどうしてそれに堪えることができるのですか。（フロリダ州マイアミ、J・F・K）

〔答〕　第一に、科学者というものは自分自身が専攻している分野以外の事柄について話す場合は他の人と同程度にすぎないということを忘れてはなりません。通常科学者は自分の専門以外の物事については、技術教育を全然受けていない一般市民以上に知っているとは言えないのです。彼ら科学者は専門的にはずいぶん研究しますので、自分の選んだ道よりも異なる分野の研究をするための時間や好みをもつことができません。不幸にしてこのことは彼らが何も知っていない物事に関して十分な意見を述べさせない状態にしています。彼らは一見権威者を装っており、それを大衆は間違いないことだと思っているのです。彼らは誰からも確定的な権威者として引合に出されます。

さて、これらの科学者達が見落している前記の問いの真の解答は何でしょうか。その秘密は円盤自体の推進装置にあります。それは性質において〝重力に従った〟なものです。

あなたが飛行機で急降下して次に急上昇するとしますと、二、三の物事が同時に起るでしょう。機体は上昇してもあなたの体の自然の傾性は体の姿勢を元のままに保とうとします。体は機体と一緒に上昇しようと

はしません。あなたは自分の体を座席に押しつける加速度を体験するでしょう。血液は頭から流れ去り、それがひどくなると一時的な意識喪失状態になります。もしこの加速度があまりに大になると実際にはあなたの体を機体の底へ押しつぶし、その結果内出血を起して死を招くことでしょう。これが科学者たちが急速な九〇度ターンを論ずる際に言及する問題点です。普通の推進装置でかかるターンをやれば、旋回したときにもパイロットは前方へ向かおうとするので押しつけられ、必然的結果として伴う凄まじい加速度で死ぬことになります。

ところで、円盤は性質が〝重力に従ったり〟な磁場をもっています。このことはその磁場が重力のすべての特性を発揮し、他の物体や力場などにたいして吸引したり反撥したりすることを意味します。

円盤が急速にターンしようとするとき、それは風圧にかかる圧力によるのではなく、地球の周囲の重力場にたいする円盤の周囲の重力場の反撥作用によるのです。もし地球の飛行機にこのような重力場が応用されれば、われわれは次のような作用をもつことになります。

すなわち、あなたが急降下の姿勢から上昇飛行に移るために操縦桿を引戻すならば、飛行機の磁場の強度と方向の変化が起るのです。この重力をもつ場は機体のあらゆる分子をもち上げるばかりでなく、機体内部の物体のあらゆる分子をもち上げます。あなた自身も機体と共にもち上げられて、加速度を全然感じることはありません。なぜなら、あなたはもはや元の運動の方向に動こうとする傾性を失っているからです。あなたの頭のなかの血液の分子もあなたの肉体や機体と全く同様にもち上げられます。それゆえ、あなたは意識を喪失することもありませんし、如何なる不愉快な感じをも体験することはないのです。あなたの肉体内の骨も船体と共にもち上げられますので、如何なるショックも感じることはありません。時速数千マイルのスピードから瞬間的に停止することも可能ですし、立ち歩いても何も感じないのです。現在、世界の多数の研究所で地球人自身の手になるこのような推進装置を完成するために各種の方法が研究されています。

（問四）　ダーウィン説については如何ですか。われわれは実際に霊長類から進化したのですか。それともわれわれの祖先は他の遊星から来たのですか。（フロリダ州マイアミ、J・F・K）

（答一）　ダーウィンは決して人間が猿から進化したとは言っていません。彼や多くの科学者は人間も猿も一つの共通した祖先の子孫であると信じているのです。この未知の祖先は長いあいだ探求されましたが、うまくゆかず、一般には〝ミッシング・リンク（註。人間と類人猿とのあいだにあると想像される動物）〟と呼ばれています。

〝類学の世界における過去の偉大な発見の多くは、近年になって反駁されています。一例をあげるとピルトダウン人があります。ピルトダウン人の存在は一九一二年に英国サセックス州ピルトダウンで発見された頭蓋骨の破片から推論されました。地球上における人類の真実の起源は何でしょうか。次にその解答があります。

現在の吾民族の祖先は（ときとしてこれは〝アダム族〟と呼ばれます）他の遊星から宇宙船で運ばれて来ました（十二種族の起源です）。人類は概して平安と調和のなかに生きることを好みますが、なかには貪欲で利己的なのもあり、そのために自己の個人的自我と喧嘩が起ってきます。次いで人間は自己の欲望を他人に強制しようとします。このことは、宇宙の法則に従って生きることを人間に命じている教えがあるにもかかわらず他の遊星にもときとして起るのです。

そこで大昔、他の遊星で知恵の導師たちが会合して、人間の生命を種

持できる他の遊星へこれらの利己的な人々を運び出すことに決めました。発達の段階において最低の人々がこの目的のために選ばれたのです。この太陽系内の目的地は地球でした。こちらへ連れて来られた人々は、この太陽系内外の多数の遊星の〝厄介者〟でした。この人々を文字どおり幽閉したり殺したりすることはできませんでした。これは宇宙の法則に反するからです。この人々はすべて同じような傲慢な性質の人であったため、また誰も他人に譲歩しようとしなかったため、自身の運命と調和を自ら開拓するように仕向けられたわけです。この導入な人々は如何なる種類の装備や道具類も持たされないまま地球へ移住させられました。これは彼ら自身の知識と性質だけでもって彼ら自身の才能に頼らせるようにそうさせられたのです。（エデンの園を離れざるを得なくなった人間のことを思い出して下さい。その後人間は激しい仕事によって自分のパンをかせぐ必要が起ってきました）

以上であなたは宇宙からの多数の使者が長いあいだ地球へ来続けている理由がわかり始めたでしょう。彼らは真実地球人に関心をもっており、だからこそ彼らは地球人を援助しているのです。あらゆる人間は（男女は）自分自身の進化の階段を昇らねばなりませんので、彼ら使者たちは公然と姿を現わしません。多くの宇宙人がわれわれのあいだに住んでいてその生き方を示しています。あなたが進化するか停止するか、どの道を選ぼうと思うかは貴方次第です。

〔問五〕　宇宙に関するこの新しい知識は宗教と教会を破壊することにはならないでしょうか。（これと同様な質問が多数来ました）

〔答〕　それは今日の教会に存在する誤りや独断の多くを破壊するかもしれませんが、実際には人間をその創造者の知識に親しく引寄せる筈です。ロサンジェルスの第一組合教会のジェイムズ・W・ファイフィールド博士は、一九六一年十二月三日付ロサンジェルズ・タイムズ紙の彼の欄で次のように述べています。「実際、大気圏外について知られた事柄はこれまでにないほどにわれわれの信仰にたいして深く広い確証を与えている。一元論的な星々の満ちた宇宙は無数の恒星を有し、それらの周囲にはたぶんわれわれのケシ粒の如き地球に似た遊星群があるだろう。同じ法則と実在の基本的な要素が宇宙の各天体のいたるところに遍満しているのだ。――スペクトルの実で、運動の実で、そして基本的な元素の実で――。一つの神がこれをもくろんでいる！　地面は平たいというエデンの信念が如何に縮んだことか、そして神人同形論的な人間の姿をした神が、この星図のなかに現われていることか」

〔問六〕　あなたやアダムスキ氏は宇宙人（ブラザーズ）が世界の各国政府で働いていると言っておられますが、この人々が宇宙人（ブラザーズ）であることを各国政府は知っているのでしょうか。（ウィスコンシン州ウワアトサ、A・H）

〔答〕　各国政府や研究機関などの或る人々は、彼らのあいだに混って働いているこの人々が他の遊星から来た人間であることを知っています。大衆は知りません。多くの政府のなかには〝コンタクトマン〟たる指導者がいて、自国内で起っているあらゆる物事によく気づいています。たとえば空軍にはコンタクトマンがいたりして、内部で働いている宇宙人（ブラザーズ）のいくらかを個人的に知っています。本人は彼らが他の遊星から来た人間であることを知っているのです。しかし本人の上官、大臣級の人でさえも宇宙人が存在することは知らないかもしれません。

〔問七〕　〝彼らは円盤につけて知りすぎていた〟という書のなかに述べてある〝黒衣の三人男（スリー・メニング・ブラック）〟とは誰ですか。

〔答〕　〝もしも〟――私は〝もしも〟という言葉を強調しますが、――この三人男が存在するとすれば、彼らはいわゆるサイレンス・グル

ープの手先であるか、またはへんくつなユーモアのセンスをもったおざけ屋でしょう。

今日多くのサギ師が宇宙人を装って往行しており、またあたかも〝黒衣の三人男〟のようにみせかけて暗躍しています。なかには国家や政府に属さずに独力でこれをやっているのもいます。多くの自称コンタクトマン、特に南カリフォーニアの婦人連は、他の遊星から来たと称している人々に会って彼女らが真実のコンタクトをしたと思い込まされております。こんなふうにして誤った情報が流これ、状況に混乱が起ってますます人々は真実のコンタクトを信じなくなるわけです。

以上が虚偽なコンタクトについて多くの考え方が起ってくる理由です。この種の情報を流すのはサイレンス・グループの計画の一部です。このグループはわれわれが真実のコンタクトを示してもそれを容易に取上げはしません。ロサンジェルスの或るグループは〝霊力〟によってアダムスキ氏と彼の計画を物碎しようとして数時間も〝祈禱〟をやったりしています。彼らは自ら理解していない何かと共に活動しているのですが、それは結局自分たちのほうへ向けられて自身を破壊することになるでしょう。

アダムスキの撮影した円盤写真をインチキなものだと考えている人にたいしては、英国の円盤研究誌〝フライング・ソーサー・レヴュー〟誌をお見せしたいものです。世界の最高权威を誇り、最大の発行部数をもつ同誌が一貫してアダムスキの円盤写真だけを真実なものと認めて十枚一組で頒布している事実は何かを物語っています。C・A・ハニー氏も十八種の円盤写真やスケッチなどを頒布しています。詳細は久保田宛に御照介下さい。

地震に関する報告

来月私は(ハニーは)地震とその原因に関する長文の報告を掲載したいと思っています。読者は新発見の或る事柄に驚かれるでしょう。また現在発生している地震の或る原因にもっと驚かれるでしょう。この報告はまた、事情を知らない人々によって〝ソニック・ブーム(註・空中の大音響)〟と言われている〝空震〟なるものについても解説することになる筈です。空震と地震のあいだには一定の型が存在しています。

地震は多くのまじめな科学者が怒いするほどこれまでにその発生回数が増加しています。たぶん学者は論説アダムスキ氏が正しいこと、地球が根本的に変化(復数)を繰りつつあることに気付き始めているかもしれません。

米国の科学者は地震ばかりでなく人工的な爆発波を記録するために、六十五ヵ国に超高感度の地震計による測定網をはりめぐらそうとしています。この〝測定計画〟本部は一九六一年十二月十八日に、その仕事は米陸軍司令部からの財政的援助を受けて始まったと言明しました。結局それは大大陸の百六十五個所の連結網となり、一九六二年の秋に完成する筈です。

面白いことには、ソ連は米国の器材の提供を断った上、自分たちは測定器具を沢山所有していると言明しました。ソ連の科学者は米国の結果に近づくでしょう。完全な測定の結果はワシントン市のカマーシャル・デパートメントに提供されることになっていて、そこで科学者が入手できるように写真のコピーが作製されることになっています。なお、この計画を立てるもととなった多くの新発見は地球観測与調査から出たものです。(註・以上でハニー氏のニューズレターオ二号の紹介を終ります)

てはいません。

この問題についてきわめて興味ある記事が、今週の誌の一九五八年三月三十日号に掲載されています。「――科学者は予言する――新たな氷河時代がはじまる」と題したこの記事はモーリス・ユーイング博士とウィリアム・L・ダン博士によって書かれたものです。

ユーイング博士は米国一流の海洋学者、地球物理学者の一人として著名であり、海底の地質に関する最高権威者です。彼は多くの海底調査用器具を自ら発明しています。ダン博士はブルックリン・カレッジの地質学の准教授で、地球観測年のための米国太西洋諸島観測網設置計画の指導者です。

二人の観点では、北極はもと中部太平洋にあって、南極はもと南太西洋にあったということです。両回の磁極の移動は一万一千年前に起ったと二人は他の証拠の始めに述べています。また最後に、この磁極の移動は一万一千年ごとに起ると述べています。したがって現在は移動期にあることを意味することになります。

ここで疑問が起ります。この磁極の移動を起すものは何か？　またこの現象にたいする科学的な理由があるのか？　ということです。答えはまさに「ある」です。このような現象の起る理由を説明する科学的理由は存在しています。

一九五九年十月二十五日付のロサンジェルス・エグザミナー紙は次のような記事を掲げました。「太陽の磁場逆転――太陽の磁極は移動した。ただし天文学者は太陽内部の如何なる大きな力がこの現象を起したかはまだ知っていない。この発見はウィルソン及びパロマー両天文台の一部である太陽観測所のハロルド・D・バブコック博士によってなされた。博士は言う。『この逆転は緩慢なもので、一九五七年のなかば頃に太陽の南極において始まり、その年内に北極地帯へ移動した』五十年間ウィルソン山に協力してきたバブコック博士は一九五二年に太陽の全磁場の観測を始めた人である。その後五年間南極は変らぬままにあり、地球の磁場のそれと正反対になっている」

太陽におけるこの変化は地球に如何なる影響を及ぼすでしょうか。かかる現象は最後に地球に影響を及ぼすのに二、三年かかるかもしれませんので、これは現在までの異常な天候や地震の謎を解くカギの一部になるかもしれません。それは地球の磁場をも逆転させるかもしれません。

地球の自然の磁力は地球をもとの運動の方向に動かし続けようとしますが、一方太陽の逆転した磁場は地球を新しい運動の方向へ行かせようとします。これが地球にたいして大きな圧力と緊張とをひき起させます。そこで地球はこの力のもとに動き始めるというわけです。

もし地球が方向を変えようとするならば、大きな回転慣運動の力が自転軸の移動と地球の表面の崩壊をひき起します。国際地球観測年の科学者たちは地球の周囲に出現した長さ四万五千マイルの巨大な割れ目をすでに地図で現わしています。世界各地の主な断層線はこの巨大な割れ目の一部です。地球の如き大海積に及ぼすこのような変化は完全に終るまでに数カ月または数年かかることを理解する必要があります。最後の激撃がいつ起るかは誰にもわかりません。これに伴う大きな自然の力（後数）は凄まじい地震をひき起すでしょう。この場合の地震は千万個の原爆に匹敵する力をもつかもしれないと予測されています。

数カ月前に破壊的な大地震がメキシコを襲ったときは、海水が逆巻きながら引いてゆくと、巨大な割れ目が海底に出現していたと沿岸の住民たちは報告しました。海水はそのあとまた押し寄せてきたということです。

一九四六年にアラスカ付近での海底地震がハワイ方面へ向けて津波を起しました。そのときにくらべると規模は小さかったにしても、一九五七年にそれは再度起っています。最初のときは、この津波は二、三フィートの高さでハのないし一〇〇マイルの間隔をおいて時速四五〇マイルでハワイに向って進行しました。それがハワイ付近の突出した海底へ近づくにつれて文字通り一波ずつ重なり、ついに四〇ないし五〇フィートの高さの大波になってしまいました。村々は海中に呑み込まれたのです。一九五七年の津波はわずか五フィートの高さにすぎませんでしたが、やはり村々を押し流しています。

もし地球の自転軸の完全な移動が起れば大地震と大津波が世界中に大破壊をもたらすでしょう。このような変化は地球の軌道ばかりでなく他の遊星にも影響を及ぼすでしょう。

太西洋の海底に口を開いた新しい割れ目が最近発見されました。地球の内部から熔岩がその割れ目を満たすために流れ出ていました。この割れ目は、まるでトゲ状の背骨に似た海底の山脈の峯々のあいだをジグザグに走っています。太西洋で発生した地震はこの割れ目と一致します。この情報はモーリス・ユーイング博士によって公に出されたものです。

地震と空震とのあいだには一つのつながりがいつも存在してきました。大抵の場合、空震は音の壁を破るときの航空機によって起されるソニック・ブームだと言われています。これは或る場合は事実ですが、多くのこのような大音響は航空機によって起されるのではありません。数ヶ月前、米国東部の上空に巨大な空震が突発しました。それはコンクリートの歩道、大通り、建築物を破壊し、一平方マイル以上の地域にわたって無数の窓ガラスを飛散させました。いわゆるソニック・ブームはこれほど強力ではありません。以下は翌日掲載された記事です。

前記のポイントは一九五九年十月五日付のロサンジェルス・エグザミナー紙に掲げられた記事のなかで明らかにされたものです。

「ジェット機のソニック・ブームは人間を傷つけることはない――十月四日ミネソタ州ドゥルース発。音の壁を破るジェット機の音はあなたに『こんちきしょう』と言わせるだろうが、しかしそれは人間を傷つけることはない。右はソニック・ブームの突発によってびっくりする人々の神経や気分をやわらげるためにドゥルース空軍司令部の情報官から出された声明の要旨である。『このソニック・ブームの結果について空軍にたいしてさまざまの不平が言われてきた』と声明では述べている。ソニック・ブームが一、二枚の窓ガラスを破ることは認められているがただしそれは先ずガラスがたるんでいるか不正確に取付けられている場合に限る。ソニック・ブームではそんなふうにはならないという例を空軍は次のようにあげている。壁や歩道を割るとき、建築の法規通りに設けられたプラスター壁を割るとき、屋根を雨漏りさせたり歪めたり割ったりするとき、家屋の骨組に損傷を与えるとき（右に述べたような窓の不完全な取付を除く）、または人間がケガをしたり家畜に害を与えるときなどである」。

右の声明が真実ならば、多くのいわゆるソニック・ブームは航空機でなくてもっと強力な何かの力によってひき起されるのです。

多くの地震は一般に空震と同じ日に起るか、または空震のすぐあとに続きます。或る場合には、重力の消滅現象らしきものが地震の発生する直前に起ります。目撃者の話では、物体が地面を離れて空間に浮揚し、目撃者たち自身も最初の震動が感じられる直前に体が無重力になるのを感じたということです。このことは、これらの地震の起源について新しい考え方を開くものです。

或る地震は地球の磁場の〝陥没〟の結果であるとは言えないでしょうか。一地点における重力の圧力の解放は大地を外方へ押し出させて、地震を発生させるのかもしれません。このことは地震が起る土地一帯の物体が無重力になることをも説明するでしょう。もし地球の周囲の磁場が除去されるならば、内部の圧力は外部へ押し出るほどに強力となり、その結果地震を起させることになるでしょう。

一万二千人の生命を奪ったアルジェとモロッコの地震をご記憶でしょうか。アルジェの地震ではまさにそれが発生したとたんにきらめく閃光を見たと目撃者は報告しています。この閃光についてはこれまでに何度も報告されています。私の信ずるところでは、これはその地点における地球の磁場の崩壊と関係があり、その結果地震が起るのだろうと思います。

地震の原因に関する別な考え方に〝土地の潮（アース・タイド）〟説があります。通常五インチ以下であるアース・タイドは海の潮をひき起すのと同じ力によって起されます（これは主として回転儀運動によるもので、月によるのではありません）。きわめて小さいものながら、これらの潮は地球内部の凄まじい圧力を増大させるのに役立ち、また地滑りの一部の原因でもあります。

地震と天候の変化は月日がすぎゆくにつれて増加しています。異常な寒暑波が起り始めるでしょう。天候の変化はいつも周期的に来ますので、これらの変化の激烈な性質が明らかになるのも遠からぬことでしょう。

（下段から続く）てパイロットの胸につけてもらうように努力するつもりです。また今春完成されているインド探険の際にエヴェレスト山頂へこのピンの一個を探険隊に持って行ってもらうつもりです。これらが実現すれば、新しい状勢にたいする興味ある周知性の基礎ができるでしょう。

バンスン氏からの書簡（三月二日付）

約十日間の留守をして帰宅したときにあなたの二月二十日付の手紙を受取って嬉しく思いました。私はカナダ織物協会との結合の用事で北部へ行っておりました。また カナダのトランブラン山のスキー場で数日をすごしました。そこは私の考えでは東半球第一流の行楽地だと思います。

そこに滞在していたあいだに私はアダムスキ氏に三通の手紙を書きました。一通はジョン・グレン中佐がキャプスルの外部に不思議な〝光〟のような光〟を見たというのが、アダムスキ氏の体験と妙に一致していることを述べたものです。彼が私に個人的に語ってくれたところによりますと、彼が宇宙丈母船の窓から外を眺めたとき、大気圏外に存在する最も驚くべきものは、暗黒の空間に見えた無数の〝星の光〟であったということでした。（註。このことは〝聖書記〟中にも書いてあります）

これはグレンが宇宙飛行を行なうときよりも約十年前のことです。頑固な科学者でさえもこの現象を最も異常な一致と考えるにちがいありません。宇宙空間におけるこの光点群をグレンが見ると誰が想像したことでしょう。この正体が何であるかについてもっと詳細を知らせてくれと私はアダムスキ氏に手紙を出しました。

数日したら再びアダムスキ氏宛に手紙を書くつもりですが、その際はあなたの活動と、日本において彼の名を不滅化させようというあなたの決意について知らせてやるつもりです。

アダムスキ氏はこの太陽系内の宇宙の家族の男性と女性を象徴的に表わした小さな飾り針（ピン）をデザインしました。たぶんこの発想は金星人から与えられたものと思います。その起源のことは語さずに私はなんとかして次回の米国人間衛星打上げの際にこれらのピンの一個を〝信任状〟として

（上段へ続く）

―編集後記―

◎ 今月はアダムスキの新著〝宇宙哲学〟の内容を紹介するつもりでしたが、原書の到着が予定より遅れましたために、かわってハニー氏のニューズレター第二号と第三号を巻記事とも全訳で載せることにしました。したがって第一頁から第十六頁の上段までは全部ハニー氏のニューズレターの紹介となっています。いずれの記事も重要な示唆を含んでいると思いますが、特に〝地震と空震〟には意味深長なものがあります。これはあくまでも科学的な調査によるもので、心霊的なメッセージ類とは根本的に異なります。

◎ アダムスキの新著〝宇宙哲学〟は先般やっと到着しました。一読しましたが内容のすばらしさに圧倒されます。これは極上の紙を用いた八十七頁からなる美しい装幀の書物で、まさに個人用バイブルとして限りない価値をもつものといえるでしょう。無駄な語句をできるだけ省略して全巻がきわめて簡潔な高雅な文章でもって生の意義と個人の魂の高揚のための助言が力強く述べてあります。目次を紹介すれば次の通りです。「宇宙哲学の定義」「緒言―真理とは何か」「すばらしい知覚作用」「知覚と概念」「意識とは何か」「肉体、心、意識」「顕在意識と潜在意識」「人間は四つの感覚器官をもつ存在」「進化の道」「信仰」「生まれかわること」「感情のバランス」「自由意志か自己暗示か」「弛緩」「宇宙の言語」「化学的な宇宙」「古代の知恵か現代の進化か」「過去の文明」「リンゴの木の寓話」「結語」「練習法」―以上。なお、この書をテキストとして自己訓練をする方法をハニー氏が別紙パンフレットに述べています。巻末にも練習法が付いています。

◎ この書は先に出された〝精神感応（テレパシー）〟の続篇または補遺ともいうべきものですが、通読して気付いたことは「テレパシー」なる語が全然出てこないということです。いや、一度だけ見当りましたが、それは古代のレムリアの文明を説いた個所に「メンタル・テレパシーの能力をもった当時の住民は云々」とあるだけです。大体近頃のアダムスキの情報類は殆ど「テレパシー」なる語を使用していません。この理由は次の通りです。すなわち、彼がテレパシー現象とその理論について学表して以来、この語を知った大半の人が誤った考え方をして、テレパシーなるものをただ「電波を用いないで遠隔地の人と通信をする術」または「いとかに他人の心を見抜く術」あるいは「宇宙人がメッセージを送ってくれる便利な連絡手段」といった便利書斎の上ない一種の魔術的な異常能力と考えてやたらにその神秘性、不可思議性のみにあこがれるのあまり、かんじんの現実の足元を忘れてしまうといった傾向が起ったことと、もう一つは或る種の低級な心霊実験を行なう人たちが自ら「テレパシー」を駆使していると思い込んで、真実のテレパシーの意義を混乱させたことなどによります。アダムスキはこれを警戒して「人並はずれた異常能力があるからといって必ずしも人間の価値判断の基準にはならない」と言っています。けだし至言というべきでしょう。

◎ 次号から〝宇宙哲学〟の全訳を連載します。円盤問題は今や全く興味本位の対象たるべき時期でなくなってしまいました。真実のテレパシーの能力を発揮して迫り来る大地の激変の波動または印象を感じ得るようになってみたいものです！

日本G・A・P ニューズレター 第5号
編集発行人 久保田八郎
発行所 島根県益田市益田古川イ五九三
日本G・A・P
昭和三十七年三月十日発行 頒価五〇円